

磐城經濟新報

發行所 磐城縣石城郡平町十五丁目廿二番地
電話 五五五
廣告料 五五五
新聞定價 一月二圓四角 三月六圓 半年十圓 一年一十八圓

九三二一年を迎ふるの辞

磐城經濟新聞社

全國二百萬の失業者とその家族とは、飢寒に一夜を泣き明し、労働者は一足履物を子供に新調し得ず昨日を越し、小市民は冷淡なる債權者來を想ひて心唯ならず、實に無産階級は悲歎、怨恨、不安、動搖の中に辛ふじて迎へたる一九三二一年ではあつた。彼等は、この惨みじき境涯にあつて何を見たか？

三味と太鼓に躍り、藝者に浮かれて馬鹿騒ぎせるブルジョアジの行状を。このランチキ沙汰に、無産階級が迎へたる新春とは如何なるものであつたか？ 山海の珍味か？ 而らずんば、椒酒、屠蘇か？ 斷じて然らず！ それこそは正に年越しの失業繼續であり、飢えの飢けであり、悉く昨年の苦難を引續延長せる以外の何物でもなかつた。ブルジョア流の新聞諸雜誌は、明朗美麗の腐儒語を用ひて年頭の辭を飾り、元旦早々日本の經濟界が好轉して一陽來復を招致するが如きデマゴークを吐き、閑散濱口井上等は「經濟界は昨年未より本年にかけて非常に好況を呈してゐる。我國も本年より漸次好況の域に進みつつある云々」との聲明を新聞に發表してゐるが、彼等の吾々を偽るたる既記の多數は「金解禁で景氣が出る」「緊縮、消費節約で景氣が出る」「ゼヒ國産！國産品を愛せ、然らば汝等に景氣を與へん！」と。政府が全機關を利用し、大袈裟な鳴物入りの景氣宣傳にも拘らず、吾々の生活に爪痕程の餘裕を與へたることはあるか？ 明滅燈の如く彩色を更へて幾度か「好況來」の看板を掲げる尻から蕭條するものは殺人的不況の嵐だ。「昭和六年度は漸次好況に向ひつつある！」との井上の聲明終らざる中に、新年に至つて米價は顯著なる騰落を示し、労働者、教員等に至つては、昨年の労働賃銀すらその支給を受けず在る現實を何とぞする。

新年とは年の肇めである。出来得べくんばこの劈頭をして心ならずも祝福し、喜色歡聲をわかせ度いが、晩近來幾星霜かの新年は「また正月が来た」といふ詠歎、不安の苦惱が誕生せしめた新年に過ぎざるものであつて畢竟、本來の眞實を得たる新年は迎ふべくして迎へ得ざるものであつた。資本主義がその專横を恣にする限り、吾々は斷じて喜樂な新年を壽ぐべき新年をして自己のものたしめぬことは出来ない。今や吾々は酒興雅樂の新年を求むるに由なく、希ふに能へられざるものとはなつた。吾々の新年に對する覺悟と態度は、自己の生活を解放する爲の團結を誓ひ、農民は極惡地主に對し小作料減免の闘争意氣を鼓舞し、都市商人サラリマン等は、電燈、瓦斯料値下、家賃引下げ等の闘争を起すべく深き決意を持たねばならぬ。

資本主義第三期の危機的徴候が明白化しつつある昨今、濱泊内閣が聲明せる如き「好況來」は斷じて考へられざる事であつて、吾々の生活が今後益々窮迫することは確乎たる事實である。然り！事實である。而して吾々の新春は支配階級との闘争によつて自己を解放し導く處の決意でなければならぬ。

親愛なる吾經濟新報の愛讀者及び應援者諸君！諸君は此處に一九三二一年を迎へるに當つて、意を新にし、氣を新にして堅忍不拔の勇を養ひ舊來の歎をかなぐり捨て生活戦線の勇士として一九三二一年の舞台に登場されんことを望む。

本紙また微力及ばざれども、熱誠なる諸君の聲援に最大限度の力を盡しその任の遂行を誓ふ。

一九三二一年を迎ふるに當り一言以て年頭の辭とす。

謹賀新年

磐城炭礦株式會社
古河炭礦好間坑業所
入山探炭株式會社坑務所
小田炭坑株式會社
小田萩原坑業所
五十嵐炭礦不動澤鑛業所
福島炭礦株式會社
古市粘土石炭探堀所
杉山炭々礦業所
東部電力株式會社
植田水力電氣株式會社
一本松電氣株式會社小名濱出張所
磐城無盡商會
湯本信用無盡會社
信用組合平庶民金庫
山崎合名會社
湯本運送株式會社
平運送株式會社
丸大運送株式會社

謹賀新年

平素の疎遠を謝し各位の健康を祈る
衆議院議員 氏 家 清
衆議院議員 木村 清
衆議院議員 比佐 昌 平
福島縣會議員 (イロハ順)
太田 三 郎
野崎 滿 藏
山崎 吉 平
古川 傳 一
鈴木 辰 三 郎
鈴木 周 次 郎
安島 重 三 郎
小金 野 成 平
小野 陸 四 郎
太田 平 登 郎
白山 井 崎 一 郎
郡司 井 藤 二 郎
直井 藤 太 郎
諸橋 久 太 郎
諸橋 元 三 郎
諸橋 敬 一 郎

喪中 賀 鶯 清 昇

病中 二付年賀欠禮申上候
高岡 唯一 郎

小作料
マケ
□
!

全農玉川支部の演説會

極惡地主のザマを見ろ

全國農民組合玉川支部のべこべに攻撃と逆襲を受け
結成を見たのは昨年末であつたが、その後、組合の根
強き不斷の鬭争は、遂に玉川支部をして強固なる組織
を確立せしめるに至つた。新年の二日、三日の兩日に
且つて早くも三ヶ所に演説會が開催された。

目散に逃げやがつた。

全農福島縣聯合會書記星野二郎君司會者となり、東京より來援した荒武者二名と婦人部長三波ミサ子女史等大いに熱辯を振ひ農民に對して深き感激を與へた。處が面白いことには、同村の極惡地主渡邊渡は右の演說會を攪亂すべく計劃的に醉漢を手先として會場に亂入せしめ、又渡邊の奴自ら演說を妨害せんとしたが、身を以て守る聽衆の貧農兄弟と、勇敢なる辯士からあつてゐる。

因みに組合の猛烈な活動に地主連は周章狼狽し寄々協議を重ね、或ひは組合幹部の買収等の舉に狂奔しつつあるが、組合の基礎は飽くまで固く斷乎たるもので

今や隣村鹿島、小名濱、泉、渡邊方面にも組合組織の觸手はのび、全磐城の暴戾な地主共を征服して強大なる農民組合の組織が實現されるのは日時の問題となつてゐる。

新年偶感

東京毎夕記者 馬場林鳥

地軸は一回轉してまたも權階級に過ぎない。吾々は角多趣多様の性格の持主だ。去年の今日となつた。人は依然として之等に追從する。唯譯もなく御芽出度うと言ふ。自分も同じく御芽出度い。眞に力ある吾々の創造に醉ふことに遅れをさるものではない。等が不自然なる所有慾の專過半の人々は君を敬遠し排而し之も過去の夢ではな。擲に任せる馬鹿々々しさだ。撃し又忌避する傾向がある。かつたか？ 現代世相は何。人類の共存の上より見てから。一つとして吾々無產階級の是程の沒理論を平氣であら。しかし君よ！心を傷むる心を満たすものがあらうか。程に吾々は傳統的に壓なかれ。？ 文明の餘光を隨喜し得迫されて來たのだ。既に時。社會の先驅者や義人は大衆に献身するが。只一部少數の特代、國、どの點線をも衆に献身するが。

大井川君

自由人山田綠雨生

長髮瘦軀にして疾風の如く敏足に街頭を行く君！
無産者のために決死的覺悟を以つて献身する君！
巷に溢るゝルンペンや生活飢餓線上に浮沈する辛牛人に熱涙はふり落して『噫無情』を痛嘆する君！

て尊貴なる義人や先驅者を
冷遇する事は學史上にも現
實にも多々ある。

邪惡鬭争を日課とし、利
權争々を事務とし、眞理を
冒瀆し、正義を求むる心滅
したる人々過多なる現代日
本と世界は先驅者も聲をひ
そめ、義人も高踏逃避して
しまつたかの觀がある。

世界と日本の現實を直視
し諦觀して唯己んぬる識の
長息あるのみだ。

× × ×
されど君よ年は新らしく
なつた。冀はくば梅花を俱
に清新なる心意氣を振起し
て住み善き人間社會創建の
ため健闘しやうではないか

イワキ
サロン
森川泰一郎
田町電話三五二番

民衆法律相談所
主 伊藤兼吉

帝國火災保險 代理店
福徳生命保險

比佐信太郎

書 店
マルトモ
柴田徳一

電話 二三四番
五九七

福島縣町村長會 石城支會
石城郡銀行組合
平町々會議員一同
湯本町會區會議員一同
好間村會議員一同

平町公立學校長懇話會

第一區小學校長會

第二區小學校長會

第三區小學校長會

第四區小學校長會

第五區小學校長會

平町旅館業組合
平町料理屋組合
平町藝妓屋組合
平町三業組合
平町西洋料理業組合
平町理髮業組合
湯本町藝妓屋組合
湯本町料理屋飲食店組合
小名濱藝妓屋組合
四倉藝妓屋組合

謹賀新年

[illegible]

謹賀新年

〔順不同〕

内郷村會議員	佐藤三平	小名濱町長	加藤丈夫	小名濱町助役	鈴木木榮	小名濱漁業組合長	高木保	町會議員	立花雄七	小名濱町	丹野寛平	小名濱町	佐々木善作	小名濱町	立花秀吉	江名町長	河野嘉藏	江名信用組合	太清左衛門	江名町	中田政吉	江名町	吉田正雄	江名町	遠藤俊一郎	小學校長	振旗弘	豐間村長	志賀兼吉	豐間村助役	鈴木木藤治郎	消防組頭	遠藤惣三郎	漁業組合長	馬目常吉	小學校長	作山一枝	豐年團長	鈴木道之助	濱屋旅館	遠藤只之助	海產物商	鈴木木友治	福島縣立	鈴木木友治
--------	------	-------	------	--------	------	----------	-----	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	--------	-------	-----	------	-----	------	-----	-------	------	-----	------	------	-------	--------	------	-------	-------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	-------	------	-------

關内藥局
平四丁目 電四〇

松の壽司
平一丁目 電一六六番
松本清之助

高瀬活版所
高瀬市太郎

丸一屋釣具店
平四丁目 加藤次三郎

鶴屋洋品店
平町 電一四〇

なかや洋服店
平二丁目 電二〇三

丸一材木店
電二九〇 瀧口豊

菓子司 泉屋
平五丁目 電六六八

藤寅
平一丁目 電一四一

ライト寫眞館
平田町大通り 電五三五

大一屋商店
平町二丁目 電一三

藤市
平二丁目 電三〇五

青木寫眞館
平町 電四二二

常磐ラヂオ商
電呼 四五五

伊勢屋商店
平四丁目 電四五

和久井屋漆器店
平一丁目 電四〇五

常盤屋時計店
平一丁目 電三三九

丸はん家具店
平三丁目 電三五九

大黒屋勝治商店
平三丁目 電二一六

株式 百澤商店
平町 電一一

小野屋藥店
平四丁目 電一四四

大崎洋服店
平町田町 電九六

一〇商店
平田町 電二六八

越の家
平町 電三三〇

難波睦
平町十五丁目

高子教藏
青物問屋 果實問屋 (平長橋町)

スピーカー自動車修繕工場
職員 一同 (電四九〇)

平銃砲火店
平二丁目 電四四一
渡邊貫一

茗荷屋金物店
店主 坂田藤助

大村屋旅館
大村一郎

武藏鐵工場
平町 遠山稻吉

西村屋藥局
平二丁目 電三
鈴木堅助

大谷時計病院
平三丁目 電一九

鈴木指物店
鈴木勝

高岡屋菓子店
平研町 電四〇六

高野卯之吉商店
平田町 電五一五

筒井鑛業所
赤井小 鑛株式會社

戸部光衛
鑛城炭礦株式會社
小野田坑先經營

若松炭礦鑛業所
鑛主 若松惣太郎

三井自動車部

三井富吉

鈴木常雄

坂田順治
鑛山業
自宅 石城郡内郷村白水

志賀兵助
鑛城炭礦平發電所
自宅 平町立町

長瀬卯太

伏見彦衛

酒井嘉藏

温泉旅館 いさみや

湯本町東町 志賀秋一

